

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 9 日現在

機関番号：12601

研究種目：若手研究(A)

研究期間：2010～2013

課題番号：22682003

研究課題名(和文) 旧植民地域における言語盛衰に関する総合的研究 - ミクロネシアを事例として

研究課題名(英文) The sociolinguistics of the rise and fall of postcolonial languages: The case of Micronesia

研究代表者

松本 和子 (MATSUMOTO, Kazuko)

東京大学・総合文化研究科・准教授

研究者番号：80350239

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 7,900,000円、(間接経費) 2,370,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、旧植民地域で形成される多言語社会における言語変化のメカニズムを総合的に解明することを主たる目的とし、パラオの旧宗主国の言語である日本語と英語の盛衰に関する言語内外的および外的要因、過程、程度をマクロ・ミクロの両視点から精緻に調査研究したものである。「社会的ネットワーク分析」の導入、「集中モデル」や「ダイナミックモデル」の検証などを含む本研究成果は、接触社会言語学分野の理論構築にも資するものであると考える。

研究成果の概要(英文)： This research project aims to explore mechanisms of language change in the post colonial multilingual Republic of Palau from both macro and micro perspectives. We investigated (a) to what extent and (b) in what way the two former colonial languages, Japanese and English, are used alongside indigenous language Palauan as well as (c) what linguistic and extra-linguistic factors are likely to affect speakers' language use.

Our findings have made theoretical contributions to the field of contact sociolinguistics; in particular, leading to a better understanding of (a) the effects of so-called "strong and weak ties" upon language maintenance and shift, (b) the applicability of the Concentration Model to the obsolescence of Palauan Japanese as well as (c) the applicability of the Dynamic Model to American postcolonial Palauan English.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学、社会言語学

キーワード：strong ties weak ties Concentration Model Dynamic Model 社会的ネットワーク 言語の維持と交代 パラオ日本語 パラオ英語

1. 研究開始当初の背景

そもそも、パラオ共和国は日本および米国による1世紀におよぶ統治を経て独立を果たし、元来のパラオ語はもとより、日本語、英語の3言語が複雑に入り混じった国家であるため、多言語社会における言語変化の実態を解明する上で最適な地域の一つであると考えられる。そのため、申請者は1997年より継続的にパラオで言語調査を行い、多様な角度から、多言語化の実態と言語変化のメカニズムの解明に努めてきた。具体的には、まず、1997年から2001年までの間、マクロな視点から、パラオの多言語使用状況の概要の把握を目指し、1世紀におよぶパラオの言語接触の歴史、日米の各統治下の言語政策、現在の住民の言語意識や言語能力・言語使用を調査考察してきた。

また、2002年からはパラオに残存する日本語に焦点を当て、「方言接触」、「言語消滅」といった2つの社会言語学的分析アプローチを用いて、その言語学的特徴を明らかにすることを目指すミクロな分析を展開した。具体的には、「パラオ日本語」の土台を成す方言間の接触に関する研究では、Mufwene (2001) が提唱した「Founder Principle (創始者効果)」を、またその消滅過程に関しては「Regression Hypothesis (後退仮説)」を検証し、さらに共時的・通時的調査・分析方法(パネル調査・トレンド調査)の妥当性を探った。

しかし、多言語化の実態と言語変化のメカニズムを一層明確にするには、これまで行ってきたマクロおよびミクロな分析の精度を高めることが不可欠であった。(1)マクロな分析に関しては、単に話者の属性の調査だけではなく、話者が日常的に接触し、大きな影響を受けている人間関係にまで踏み込んだ緻密な分析手法として注目を集めている「社会的ネットワーク分析(social network analysis)」を取り入れることで、言語維持と言語交代を促すメカニズムの解明に一層迫ることができる。

これまで Milroy (1980) らの研究によって、話者の持つ「strong ties (強い紐帯)」は、仲間同士の結束を強め、同質性・類似性を互いに補強する反面、外部からの影響を排除する作用があるため、従来の言語使用の保持には有用であるものの、外部からもたらされる新しい言語変化へは障壁となること、一方「weak ties (弱い紐帯)」とは、強い紐帯よりも個々の関係性は薄いものの、数的には多数を占めるため、新しい

情報をもたらす「懸け橋」のような作用を有することから、言語変化を助長する効果を発揮することが明らかにされている。しかし、こうした研究結果は、主として単一言語社会における方言研究においてはその有効性が認められてきたものの、複数の旧宗主国言語と土着語が共存する多言語社会においても同様の作用・効果が得られるかどうかは必ずしも証明されてこなかった。

次に、(2)ミクロな分析に関しては、「パラオ日本語」話者の高齢化が進むなか、「最後の話者」を記録することができれば、より正確に Wolfram (2002) が提唱した言語消滅モデルの一つである「集中モデル(Concentration Model (「最後の話者」は完全な言語能力を維持し続け、方言的な傾向を強める))」を検証することが可能となり、言語消滅のプロセスの解明に役立つことができる。言語消滅の分野では、「最後の話者」を記録することの重要性がこれまで幾度も指摘されている(Edwards 1985, Dorian 1989)。

なお、言語消滅の進むコミュニティでは話者の高齢化の進展により、多数の健全な被験者から研究計画書通りに会話データを収集し、新たなデータのみで定量分析を行うことがもはや困難な状況にあることが多い。パラオもその例外ではなく、まさにそうした事態に直面しているため、パラオ日本語の研究のみを単独で申請することは躊躇われた。

一方、半世紀もの米国統治を経て形成・定着し始めた「パラオ英語」に関する研究は、パラオの多言語化の実態と言語変化のメカニズムの解明に不可欠なものであるにもかかわらず、未だに十分な研究が成されていない。近年、ポストコロニアル英語変種に関する研究では、Schneider (2007) が提唱した「Dynamic Model (ダイナミックモデル)」が最も脚光を浴びており、世界各地に存在するポストコロニアル英語変種の研究者たちがこぞって当該モデルの妥当性・応用性を検証している。しかし、当該モデルはそもそも英国の旧植民地域の英語変種を基に構築されたものであるため、米国の旧植民地域の英語変種にまで応用性があるか否か、またあるとしてもどの程度あるのかは明らかにされていない。

2. 研究の目的

上記のような状況を踏まえ、本研究では、

旧植民地で形成される多言語社会における言語変化のメカニズムを総合的に解明することを主たる目的とし、パラオの旧宗主国の言語である日本語と英語の盛衰に関する言語内的・外的要因、過程、程度をマクロ・ミクロの両視点から精緻に調査分析した。

具体的には、これまでのマクロ・ミクロな両分析の精度を高め、上記(1)(2)の研究を進展させることに主眼を置いた。まず、(1)マクロな分析としては、新たに「社会的ネットワーク分析」を取り入れ、言語維持と言語交代を促すメカニズムを一層明確にした。本研究により、従来「強い紐帯」と「弱い紐帯」が方言変化に発揮するとされている効果・作用が、多言語社会の言語の維持と交代へも応用されうるかどうかを検証できるため、マクロな接触社会言語学に関する理論の構築へ貢献しうるものとなる。

(2)ミクロな分析に関しては、まず①パラオ日本語とパラオ英語という2つの接触言語変種の言語学的特徴を明らかにすることを旨とした。とりわけパラオ英語に関する先行研究は皆無であったため、その言語学的特徴を詳細に記述することは貴重な事例を社会言語学研究に提供することとなると考えた。

次に、②「集中モデル」「ダイナミックモデル」といった理論の検証を行い、言語消滅・言語変化のプロセスの解明に役立てることを旨とした。とりわけ、パラオ英語が米国の旧植民地下で発達したことから、本研究は米国旧植民地を事例とした「ダイナミックモデル」の妥当性・応用性を本格的に検証する初めての試みであったため、ポストコロニアル英語変種に関する理論の構築にも資すると考えた。

以上のように、本研究は、独立後、消滅と拡散という、いわば相反する方向に展開する二つの旧宗主国の言語をマクロ・ミクロの両観点から調査考察することで、パラオの多言語化の実態と言語変化のメカニズムを総合的に解明し、さらに社会言語学分野の新たな理論の構築を目的としたものである。

3. 研究の方法

本研究においては、マクロ・ミクロな分析を行うためのデータを揃え、順次その整理・書き起こし作業、データ分析、諸理論の検証を進めてきた。

具体的には、まずマクロな分析の精度を

高めるために、現地調査にて話者の社会的ネットワークに関する詳細な基礎データおよび会話データを収集し、帰国後、各種統計を駆使して言語使用と言語外的要因の関係を分析した。

また、パラオ日本語に関するミクロな分析を補完し、同時にパラオ英語に関するミクロな分析に本格的に着手するため、現地調査においては高齢なパラオ日本語話者からデータ収集が困難な場合には、数の上では相対的に多く存在する健常なパラオ英語話者からデータを収集するなどの代替的措置を講じながら、現地での時間を有効活用した。さらに、たとえば地名に関する言語変化の有無など「ダイナミックモデル」の検証に必要な情報の収集にもあたった。

所要のデータ収集後は、①パラオ英語の言語学的特徴を音韻・統語・語彙レベルにおいて記述し、さらに②「ダイナミックモデル」の妥当性・応用性を検証した。またパラオ日本語の研究では、③新たに入手したパラオ日本語のデータをもとに「最後の話者」の記述およびその定性分析を行った。さらに④これまでの既往の旧データと今次の新データを活用することで定量的かつ通時的な分析を行い、「集中モデル」の応用性の本格的な検証を開始したところである。

なお、パラオにおける日本語と英語、そして両言語のマクロ・ミクロな両分析を進めることにより、今後は他の旧植民地との対比・比較を行い、パラオにおける旧宗主国の言語盛衰に関して、総合的・包括的な研究を引き続き展開する予定である。

4. 研究成果

(1) マクロな分析考察結果

本研究では、旧植民地かつ多言語社会であるパラオで、2つの旧宗主国言語（日本語・英語）および現地語パラオ語の使用の実態を把握し、言語の維持と交代に関するメカニズムを解明するため、大別して3つの疑問を掲げ、社会的ネットワークの有効性に考察を加えた。すなわち①果たして社会的ネットワークが旧宗主国言語の使用変化を説明することができるのか、できるとすれば、どのように説明できるか、②多言語社会でも単一言語使用社会と同様の社会的ネットワークの機能がみられるのか、そして③社会的ネットワーク分析に最も適した社会の特徴は何かという疑問に対する答えを導き出すことを目指した。

本調査・分析の結果、社会的ネットワー

クに着目した分析モデルは、多言語社会パラオにおいても、旧宗主国の言語である日本語および英語の維持、さらには交代のメカニズムを解明する上でも有効であることが明らかにされた。すなわち、単一言語社会と同様に、「強い紐帯」は地元ですでに定着していた日本語使用を維持させる機能を持ち、併せて新しく導入された英語が取って代わることを拒む機能を持っていること、そして「弱い紐帯」は「懸け橋」としての役割を果たし、英語使用を拡大させていることが明確にされた。

また、本調査・分析は3つのコミュニティーを調査対象としたが、①グループ選択の自由度、②政治的、経済的および社会的変化の度合いの強弱や濃淡によって、社会的ネットワークが言語使用に及ぼす影響に差異が現れることも解明された。この特徴は、1989年にLippi-Greenが行ったオーストリアにおける言語調査と一致しており、今後、他の地域にも普遍化できる可能性を有するものでもある。

さらに本分析結果から、社会的ネットワーク分析の限界や留意点を指摘することもできた。すなわち、パラオでは必ずしも英語は日常生活の中で常態的に用いられている言語ではなく、また住民の父祖の代から潜在的に用いられている言語でもない。そのような状況下であれば、たとえ学校などの場で間接的に英語教育が実施され、若年世代を中心に英語への言語交代が進行していても、社会的ネットワークの分析はそれほど有効性を見出すことができないのである。元々のパラオ人をはるかに上回る邦人移民がパラオへ移住・定住した日本統治下とは対照的に、米国統治下には本国からの移民はほぼ皆無であったため、パラオ人の社会的ネットワークはそれほど影響を受けなかった。したがって、社会的ネットワークと英語使用の関係を単独で分析すれば、上記のように「弱い紐帯」が「懸け橋」としての役割を果たし、英語使用を拡大させていることが見て取れるが、言語能力や世代、アイデンティティなどその他の言語外的要因を含めた複合的な分析を行うことにより、社会的ネットワークよりも他の要因の方が強い影響を及ぼしていることが判明した。英米の旧植民地の諸地域においても、英語への言語交代の広がりや報告されていることから、こうした指摘は今後の分析手法において大きな示唆を与えるものであると考えられる。

(2) ミクロな分析考察結果

一方、パラオ英語の言語学的特徴に関しては、音韻・統語レベルにおいてSchneider (2007) が旧植民地英語変種に典型的なものとして挙げている特徴を多く含むこと、

さらに、リングア・フランカとしての英語Seidhofer (2005) としての特徴も兼ね備えていることが本研究で明らかにされている。

また「ダイナミックモデル」の検証に関しては、英国植民地と米国植民地とでは時代背景が異なるため、統治目的・方法にも違いがあり、Schneider (2007)の分類方法をそのまま適用することは困難な点もあるものの、概ね米国の旧植民地への応用は可能であることが示唆された。さらに、Schneider (2007)は旧植民地英語変種の形成過程を5段階で示しているが、パラオ英語はその2段階目と3段階目の間に位置することを指摘した。

今後はこれまでの研究成果を踏まえ、分析の精度と確度を一層高めながら、引き続き旧植民地域で形成されてきた多言語社会における言語変化のメカニズムの解明を通じ、接触社会言語学分野の諸理論の検証と新たな理論の構築に取り組む予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 6 件)

- Matsumoto, Kazuko (2013b). Cake baking in a postcolonial Japanese speech community: Koineisation of Palauan Japanese in the Pacific. *Language, Information, Text* 20: 63-85.
- Matsumoto, Kazuko and David Britain (2012). Palauan English as a newly emerging postcolonial variety in the Pacific. *Language, Information, Text* Vol. 19. Pp137-167.
- Matsumoto, Kazuko (2011). Contact sociolinguistics of diaspora Japanese: Linguistic innovation and attrition in the Western Pacific. *Language, Information, Text* 17: 33-61.
- Matsumoto, Kazuko (2010a). Palauan language contact and change: A sociolinguistic analysis of borrowing in Palauan. In J. Dobovsek-Sethna, F.

Fister-Stoga, C. Duval (eds.), *Linguapax Asia: A Retrospective Edition of Language and Human Rights Issues, Collected Proceedings of Linguapax Asia Symposia 2004 – 2009*. Linguapax Asia: Tokyo (Chapter 3: Pp36-52)*.

- Matsumoto, Kazuko (2010b). The role of social networks in the post-colonial multilingual island of Palau: Mechanisms of language maintenance and shift. *Multilingua* Vol. 29, No. 2, Pp133-165*.
- 松本和子 (2010c) 「ミクロネシアの日本語」『日本語学』Vol. 29, No. 6, Pp58-73. 明治書院.

[学会発表] (計 13 件)

- (招待講演) Britain, David and Matsumoto, Kazuko (2014). English in Paradise?: A new variety in the Pacific. The Jenny Cheshire Lecture 2014. 13 June 2014, Queen Mary, University of London, London, UK.
- Britain, David and Matsumoto, Kazuko (2014). Little America in the Pacific?: The formation of postcolonial Palauan English. Sociolinguistics Symposium 20. 15-18 June 2014, University of Jyväskylä, Jyväskylä, Finland.
- Britain, David and Matsumoto, Kazuko (2013). English in Paradise?: The history, status and structure of Palauan English. 19th Conference of the International Association for World Englishes, Arizona State University, Tempe, Arizona, USA, 16th-18th November 2013.
- Matsumoto, Kazuko and Britain, David (2013). Palauan Japanese as an endangered postcolonial variety of Japanese in the Pacific. Colonial and Postcolonial Linguistics, University of Bremen, Bremen, Germany, 3rd-8th September 2013*.
- (招待講演) Britain, David and Matsumoto, Kazuko (2013). Palauan English: An emerging new variety of the Western Pacific. Research Seminar presentation, School of Linguistics and Applied Language Sciences, Victoria University of Wellington, New Zealand, 17th May 2013.
- (招待講演) Britain, David and Matsumoto, Kazuko (2013). Palauan English: An emerging new variety of the Western Pacific. Research Seminar presentation, New Zealand Institute of Language, Brain and Behaviour, University of Canterbury, Christchurch, New Zealand, 20th May 2013.
- (招待講演) Britain, David and Matsumoto, Kazuko (2013). Palauan English: History, development and structure. Research Seminar presentation, Department of Linguistics, Waikato University, Hamilton, New Zealand, 29th May 2013.
- Matsumoto, Kazuko (2013). Discourse-pragmatic change in shifting language: Evidence from a postcolonial Japanese variety in the Pacific. 1st International Conference on Language Variation and Change in Postcolonial Contexts, University of Salerno, Salerno, Italy, 18th-19th April 2013.
- Matsumoto, Kazuko (2012). Testing the Dynamic Model: An analysis of an American postcolonial variety of English in the Pacific. 2nd International Conference on Cultures and Languages in Contact, Chouaib Doukkali University, El Jadida, Morocco, November 2012.
- Matsumoto, Kazuko (2012). Discourse-pragmatic change in shifting language: Evidence from a postcolonial variety of Japanese in Micronesia. International Conference on Language Contact in Asia and the Pacific, University

of Macau, Macau, September 2012.

- Matsumoto, Kazuko and Britain, David (2012). Palauan English as a newly emerging postcolonial variety in the Pacific. 2nd LINEE Conference: Multilingualism in the public sphere, Inter-University Centre, Dubrovnik, Croatia, May 2012.
- Matsumoto, Kazuko (2012). *I've been drinking since I was young, haven't I?: A short-lived innovation of the tags in a postcolonial variety of Japanese*. Discourse-Pragmatic Variation Conference, University of Salford, Manchester, U.K., April 2012.
- Matsumoto, Kazuko (2010). An endangered Japanese contact variety in the multilingual Republic of Palau: A new expanded function of the tag *desho*. 43rd Annual Meeting of the Societas Linguistica Europaea, September, Vilnius University, Vilnius, Lithuania.

[図書] (計 2 件)

- Britain, David and Matsumoto, Kazuko (2014). Palauan English: History, status and linguistic characteristics. In Daniel Schreier, Peter Trudgill, Edgar W. Schneider and Jeffrey P. Williams (eds.), *Further Lesser-Known Varieties of English*. (Studies in English Language). Cambridge: Cambridge University Press.
- 松本和子 (2013a) 「パラオ日本語の語用論的変異と変化」. 岡村徹・ヤラベアアポイ(編)『オセアニアの言語的世界』 溪水社. Pp. 220-262.

[その他]

- 松本和子 第10回日本オセアニア学会賞受賞. 2011年3月(受賞論文 2010b).

6. 研究組織

(1) 研究代表者

松本 和子 (MATSUMOTO, Kazuko)
東京大学・大学院総合文化研究科・准教授
研究者番号：80350239

(2) 研究協力者

デイビット・ブリテン (BRITAIN, David)
ベルン大学・英語英文学部・教授